
漆黒の姫

沖宮梓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒の姫

【Nコード】

N 6 2 5 9 H

【作者名】

沖宮梓

【あらすじ】

攘夷戦争が終結して数年後、江戸の町に少女が舞い降りる。彼女の異名は“漆黒の姫”。少女と武装警察・真選組の面々は、導かれる様に巡り会おうとしていた――。

ブローグ

曇天の下、大地は地獄と化していた。

煙が立ち上り、煙の匂いが漂う。

だが、それよりも強烈なのが、血の匂いだ。

幾ら歩こうとも、その匂いが絶える事無く、体に染み付く。

更に、大地を埋め尽すは死体の山。

安らかな表情で逝った者から、苦悶の表情の中逝った者迄、その表情は様々だ。

だが皆一様に、どす黒い血に塗れていた。

屍の隙間に一つの人影が立っている。

その人影は、刀さえ手にしてはいるものの、容姿は少女そのものだった。

少女の目には虚しさの色が映っていた。

彼女にとってのこの戦争は全く意味を成さないモノであつたからである。

暫くして、雨が降り始めた。

煙が混じり、雨は黒く見える。

雨が降り注ぎ、屍を濡らす。

少女にも雨は降り注ぐ。

頬から流れ落ちる雫の正体も解らず。

侍達の心も晴れぬまま、

攘夷戦争は終焉を迎えた。

第一訓 畏仕掛けといて自分で畏に掛かったら恥ずかしいよね

江戸、

20年前の天人襲来によって栄えた都市。

数多の人々が暮らし、働く。

その片隅、路地裏に、少女は居た。

路地裏にしゃがみ込み、壁に背を預ける少女。

髪は漆黒、瞳は藍色。所謂「美少女」である。

傍には刀が転がっており、少女の所持品だという事が窺える。

更に走ったのか、肩で息をしており、薄らと汗を掻いていた。

汗を掻いている理由は他にもあった。

少女の着ている着物の腹部には血が滲み、彼女は其処を手で押さえ
ていた。

押さえてはいるものの、腹部からはなおも血が滴っていた。

彼女は路地裏に辿り着く迄に、道端に大量の血痕を残して来てしまった。

だからこそ、あんなにも道行く人々に好奇や疑いの目で見られたのだ。

そうやって漸く路地裏迄辿り着いたは良いが、長時間傷を放置していた為に、彼女の体は限界ギリギリに迄達していた。

又、大量出血の末に彼女は貧血を起こし始めていた。

やがて、少女は意識を手放し、その体はアスファルトに崩れ落ちた。

その手で刀を掴んだまま。

「土方さん、これ見て下せエ」

土方十四郎はその声に、瞳孔が開いた目を向ける。

そして、

「…んだ、これ」

疑問を口に出す。

「何って、血痕ですよ。血痕」

沖田総悟は、飄々と言う。

「そうそう。結婚だよ、結婚！」

近藤勲は、脳内漢字変換を誤ったか、的外れな事を言う。

「いやあ、お妙さんとの結婚は何時になるかな。お妙さんにはやっぱり白無垢だよな。あ、でもきつとウエディングドレスも似合うだろうな。お妙さんは一輪の花の様に美しく、魂さえも暁光の如く輝いて…」

「で？血痕いよがどうしたっていうんだ、総悟」

近藤の話を華麗にスルーし、本題に戻す土方。

「こんな道端に血痕があるってえのは、おかしくないですかイ？」

「え……ちよつ……、トシ？……十四郎君？……総悟？……」

土方達の背後で段々と涙目になるゴリ……コホン、失敬、近藤。

そして、「いいもん、どうせ俺なんかゴリラだし……」と事実を認め、いじけた。

「どうせ、攘夷浪士でも暴れ回ったんだろ」と、煙草を取り出し火を付け、血痕を見やる土方。

「いえ、それにしても変でさア」

「あ？」

「浪士の奴らが乱闘でもしたっていうんなら、もう少しばかりこの辺りが騒々しくてもいいんじゃないんですかイ？」

「まあ、確かにそうだな」

沖田の推測にも一理ある為、土方は地面を見つめ、考え込む。

「あ、土方さん」

唐突に沖田の声が降って来たので、土方は思わず顔を上げる。

「あれ見て下せエ」

そう言つて、ある方向を指し示す沖田。

其処には、転々と落ちる血痕。まるで某グリム童話のパン屑の様だ。

点在する血痕は、どうやら路地裏に繋がっている様。

薄暗い路地裏からは、何やら恐ろしい空気が漂っており、遠距離からでもそれが解った。

薄暗いのと、恐ろしい空気から二人が想像するのは、ただ一つ――
|。

「総悟、お前行け」

「嫌でさア」

即答する沖田。

「いいから、行けつつってんだろっが！」

「土方さん、汗漉いですよ」

「う、五月蠅え！どど、どうでもいいんだ、んな事あ！」

「……土方さん、もしかして、ゆ……」

「バ、馬鹿言ってんじゃ無えよ！お、俺が幽霊なんて怖い訳無えだろ！」

「土方さん、俺“ゆ”としか言ってますが」

「！」

墓穴を掘る土方。

「そついや以前、ゴミの分別のCMでゴミ箱から女が出てきましたね。確かあの路地裏はゴミ捨て場だった様な……」

「！」

追い打ちを掛ける沖田。

「そ、総悟。お前、はは、早く行けよ」

土方の声が震え始める。

「嫌でさア。浪士の罨かも知れないですからね。

それとも何ですか、土方さん。まさか路地裏あそこに幽霊が居ると決め付けてんですかイ？

そんな物、まやかしですよ」

「そ、そうだ。そんなん、いい、居る訳無えよ。だ、だから総悟行つて来いよ」

土方の声は除々に震えを増す。

それに対して、溜め息をつく沖田。

「別に俺が行っても良いんですけどねイ。

……あれ？もしかして土方さん。

怖いんですかイ？」

確信をつき、挑発する。

「ババババ、馬鹿言ってるじゃ無えよ！お、俺がそんなにビビる訳無えだろが！」

先程と同じ様な会話をエンドレスさせる土方と沖田。

「よよ、よし。行つてやらあ！」

幽霊が何だ。そんなんが存在するならなあ、是非御目に掛かりたいもんだ！

攘夷浪士なら更に上等だ！どっからでも掛かってきやがれてんだ！」

自暴自棄になり、路地裏に向かって大股で歩いて行く土方。

その額には冷や汗が浮いている。

「それでこそ『鬼の副長』でさア。さて近藤さん、何時^{いつ}迄いじけて
んでさア。行きますぜイ」

未だいじけている近藤を引き連れ、土方の後ろから着いて行く。

「お、おい。誰か居るか？」

傍迄寄ると、更に暗い路地裏を覗き込み、弱々しい声を掛ける土方。

「土方さん、そんな声の掛け方する警察が何処に居るんでさア。相
手は攘夷浪士かも知れねーんですよ？もっと強気に行かなくちゃ。」

おーい。お前は完全に包囲されているー。とつとと神妙にお縄に付
きやがれイ」

この場の緊迫した空気とは裏腹に、間延した声で所在の解らない人
物に呼び掛ける沖田。

暫く、場が沈黙に包まれる。

「…出て来やせんね」

「素直に出て来る奴が攘夷やつてる訳ねーだろ。」

仕方無え。強行突破と行くか」

堂々と真正面から路地裏に入って行く土方と、それに着いて行く沖田と近藤。

「お」

と、薄暗い路地裏やみの中で、土方が何かを発見した。

「どうしたんです、土方さん」

「あそこ見てみる」

土方の視線の先を見やる沖田。近藤はといえば、未だにいじけている。

最初は薄暗くて物も満足に見られなかったが、路地裏やみに居る内に段々と目が慣れ、視界にある物が見える様になってきた。

とはいえ、“それ”は到底“物”と呼べる存在では無かった。

まず最初に見えたのが、綺麗な漆黒に染まった、とても長い髪。

次に、鮮やかな桜色の布。どうやら着物だと認識する。

そして、着物の端から覗く白い肌。四肢だった。

それらの事から、彼らは“それ”を“人間^{ヒト}”だと認識した。

加えて、“それ”の腹部辺りからは、真紅の鮮血が流れ出ている。

鮮血^{それ}を視界の中に認めた土方十四郎が取る行動は一つだった。

「おい！」

呼び掛け、それへと駆け寄る。

最早、幽霊や攘夷浪士の事など、頭に無かった。

「おい、どうした」

それに駆け寄り抱き上げ、声を掛ける土方。

その弾みでその顔に掛かっていた漆黒の長髪が舞い上がり、顔が見える。

どうやら、女の様だ。

土方はふと思った、その刹那

「呪ってやるうう———！」

そんな声が、響いた。

「ぎゃあああああ！」

背後からそんな声を浴びせられた土方は江戸中に木霊する様な悲鳴を上げた。

「嫌ですぜイ、土方さん。ジョークですよ、ジョーク」

声の主——沖田は、相変わらず飄々とした声色で言った。

「てめえか総悟！しかも何だその拡声器、何処から出した！俺の鼓膜を破るつもりか！」

沖田の手には何処から出したのか、拡声器が握られていた。

「そんな事より土方さん、この女はどうするんでイ。見た所、かなりの別嬪じゃないですかイ」

沖田がさりげなく話を逸らし、視線を倒れている女へとやった。

「…とりあえず、屯所迄運ぶか。」

おい、総悟。女の荷物持て。

近藤さんも。何時迄もいじけてないで、行くぞ」

腹部が血塗れの女を抱きかかえる。所謂「お姫様抱っこ」である。

まあ、一応腹へのダメージを避ける為なのだが。

「土方さん、この女、刀持ってますが」

女の所持品の一つであろう刀を拾い上げ、土方にホラ、と見せる沖田。

「話はコイツが起きてからにすらあ。幸い、命に別状は無さそうだしな」

そう言つて、真選組局長の近藤勲、副長の土方十四郎、一番隊隊長の沖田総悟、それから、血塗れの謎の女は、彼らの“居場所”である真選組屯所へと帰って行った。

これが、この物語の主人公となりうる少女と、真選組の面々との最高にして最悪な一応の出逢いだった。

第二訓 狸寝入りって素晴らしい

——夢を見た。

もう二度と戻る事の無い、私が一番笑っていた日々。

アイツら皆居て、……先生が微笑んでいて。

アイツら、今何してんのかな。

そして、私の欲しかったモノが全部あった頃。

あの時全てを失った私には、逃げる事しか出来なかった。

もしも、もう一度逢えたなら……、

アイツらの団子盗み食いしたの、謝れるかな。

「——おい」

少女は、戻る意識の中で声を聞いた。

少女はその呼び掛けを無視し、尚且つ寝たフリ極め込む事にした。

「——おい」

だって、五月蠅いのである。

ただでさえ、二度寝しようとしている所を邪魔されて、少女は不機嫌だった。

「おい」

はいはい、私寝てますよ。起こしても無駄ですよー。

あー、もう。体揺するな。腹が痛いんだ、私は。

だが、

「おい」

「五月っ 蠅えよ！こっちは眠いんだよ！大人しく寝かせろや！」

寛容な少女にも、我慢の限界というモノがあった。

ふと我に返る少女。

目の前には啞然とする三人の男。皆一様に同じ服を着ている。

ゴリラの様な顔つきの男。

美形だが瞳孔開き気味の男。

亜麻色の髪的美男子。

とりあえず硬直しきつたこの場をどうしようかと考え、一、二、三秒。

「じゃ、お休みなさい」

少女は睡眠を優先するかのように、その場の空気から逃げた。

「……………」

「いやいやいや、違うでしょ！？何で自分関係無いとばかりに寝てるの！？」

ゴリラがツツコンで来ました。五月蠅い奴です。

「……ZZZZZZ……」

「いやいや、起きてるよね！？ていうか、それどうやってやってんの！？」

一々細かい事気にするゴリラです。そんな事、この世界ではどうにでもなります。

「すぴー」。

うーん、母ちゃん。未だ七時だよー」

「いや、俺母ちゃんじゃないからね？そして今は十二時だよ？」

「ちっ、ギャグが通じないゴ…人ですね。つまんないの」

少女は諦めたかのように起き上がって舌打ちする。

そして辺りを見回し、一言。

「狭い所ですね、馬小屋？」

あつ、間違えました。此处、何処ですか？」

「どんな間違え方！？明らかに本音が出たよね！？」

「止めとけ近藤さん。」

女、此处は真選組屯所だ」

近藤を嗜め、少女に告げる土方。
たしな

「真選組……………」

ああ、あの「カス」とか「最近出過ぎ」な奴らが沢山居る所ですよ
ね？」

真顔でサラリ、と爆弾を放つ少女。

「テメエ！さては攘夷志士の回し者か！たたつ斬る！」^{モン}

立ち上がり刀を抜く土方。

「短気は損気ですよ、ニコチン野郎」

表情も姿勢も変えず、眉間に刀を突きつけられながらも冷静な少女。
その目には迷いや焦りが一切見受けられない。

その堂々とした姿に一瞬怯む土方だったが、直ぐにいつもの『鬼の副長』の目に戻る。

「テメエ、嘗めてんのか！何だニコチン野郎って！」

「だって、煙草臭いんですもん。コホコホ、ちよつ、こつち寄らないでくれます？」

わざとらしく咳き込み、顔をしかめる少女。明らかに挑発している、初対面の男を。

一方土方は、くわえていた煙草を灰皿に押し付け、再び少女を睨む。

「これで満足か！」

「土方さん、其処らで止めときなせエ」

ふと、今迄傍観していた沖田が、口を開いた。

「その女、いくら暴言吐いたとしても、怪我人ですぜイ。
傷口開いたらどうするんでイ」

「……ああ、そうだな」

そう納得し、刀を鞘に収める土方。

だが、

「……………傷？」

少女は目を丸くし、沖田の言葉に疑問を持っていた。

「あんだ、腹から血イ出て、路地裏で倒れてたんでさア」

「……腹……………路地裏……………、あっ！」

突然、何かを思い出した様に天井を仰ぐ少女。

「刀！刀は！？」

先程迄の冷静な態度とはうって変わって、落ち着きを無くす。

自身の負傷の事など、頭に無いかの様に。

「刀なら——此処にあるが」

近藤が視線で示した刀を拾い上げて、少女は安堵の表情を浮かべた。

「御安心の所悪いが、一、三訊きたい事がある」

土方が神妙な面持ちで、そう切り出した。

それを聞いて少女の表情は一気に険しい物となる。

その表情を見て、沖田が一言付け加えた。

「大丈夫でさア、別にあんたを攘夷だ何だと疑っている訳じゃねエ」
沖田はそう言ったが、攘夷と関係があると疑っているのは、明確だった。

身なりは普通の女の物なのに、使い込まれた刀を所持。

加えて、未だ少女とは思えないあの、何にも動じない、覚悟を決めた様な目。

腹に負った傷。

更に、攘夷志士が口にする様な、真選組への暴言。

三人が攘夷志士、あるいはその関係者と疑うのも無理は無い。

だが、少女は三人の思考をも見抜いていた。

「良いですよ別に、疑ったって。私が疑わしいのは、自分で十分解ってますから」

少女の真っ直ぐな目に、三人は威圧される。

「その代わり、その質問に答えるかどうかは保証出来ません。」

訊かれたくない事の二つや三つ、貴方達にだってあるでしょう?」

土方は長考した末に、

「……………解った、答えたくない事には答えなくていい」

承諾した。

「早速訊くが、お前、何故、何処であんな傷を負った?」

「何故でしょうね」

初っ端から答える気0の少女。

土方の額に青筋が浮かぶが、懸命に抑えている。

「…お前、攘夷志士と何の関係がある?」

「やっぱり疑ってましたか。でも、答える気はありません」

「…お前は、何者だ？」

「正直者です」

真顔でボケた少女に、土方の怒りは頂点に達する。

「テメエ、やっぱ嘗めてんだろ！たたっ斬る！」

「土方さん、答えたくない事には答えなくていいって言ったのは土方さんですぜイ？」

自らルールを課しといて、自分で破るんですか？」

沖田の事実をついた一言に、土方は溜め息を吐き、少女に向き直り、諦め半分で訊いた。

「じゃあ、お前の名は何だ」

「.....
神崎葵」
かんさき あおい

第三訓 鬼ごっこは振り返ったら負け

「トシよお、あの子、何者だ？」^{モン}

屯所の廊下に、近藤の声が響く。

更に、三人の足音がリズム良く木の板を鳴らす。

「知るか、俺に訊くな。

ただ、一つだけ確かなのは、

あの女が攘夷志士と何らかの関係を持っているという事だ」

土方の目に、力が入る。

ふと、その重い空気に、何とも呑気な声が入る。

「でも、もし攘夷に関係があるなら今頃その女、

屯所からトンズラしてるんじゃないですかイ？」

三人の足が止まる。

「……………」

そして、三秒後

「トト、トシィィィ！あの子が居なかったら、お前の責任だからな
！」

「何言ってんだ、あの女部屋に置き去りにした近藤さんの責任だろ
！」

「いや、あの子にマヨネーズ勧めたトシの責任だ！」

「勧めてねーよ！勝手に事実曲げんじゃねえ！」

近藤と土方は、突如廊下を早歩きで移動し始めた。

二人とも、表情は焦りに満ち、

脳内は、どうやってコイツに責任を押し付けようか、と考えていた。

そして二人の後をマイペースに着いて行く沖田は、明日はどうやって土方をアイツ陥れようか、と考えていた。

「近藤さん、土方さん。部屋、通り過ぎましたよ」

沖田の言葉に、二人はUターンする。

そして、先程迄自分らが居た部屋の襖を盛大に開ける。

部屋は、もぬけの殻。

案の定、少女は居なかった。

部屋の隅には、皺の一つも無く畳まれた布団。

部屋は日常を保っている。

ただ、少女と刀だけが忽然と姿を消していた。

暫く思考停止していた近藤と土方は我に返って、屯所の正門へと走る。

だが、

「土方さん。女、居ましたぜイ」

目的地である正門の方向から間延びした沖田の声が聞こえ、二人の足取りは一層速くなる。

「おい総悟！女は！？」

「此処でさア」

土方達が正門前に着くと、沖田は壁に背中を預けていた。

戸惑う女——神崎葵の腕をしっかりと掴んで。

「あの、私行かなきゃいけない所があるんですけど」

部屋に連れ戻されて葵が発した第一声がそれだった。

「悪いな、こっちも仕事なんだな」

土方が再び、煙草に火を付ける。

今度は葵も、何も言わなかった。

「……言わなきゃ帰さないという事ですか」

葵が溜め息を吐き、土方を恨めしそうに睨む。

「そついう事だ。えらく物解りが良いじゃねえか。」

その物解りの良さ、真^{ウチ}選組に欲しい位だ」

土方も同様に目の前の少女を睨む。

暫し双方の威圧感がぶつかり合う。

「そうだとシ！」

ふと、近藤が思いついた様に手を打つ。土方と葵はお互いに視線を逸らす。

その晴れた表情に、土方は嫌な予感を隠せない。

「……何だ、近藤さん」

すると近藤は嬉しそうに言った。

「その子を真選組に入れば良いじゃないか！」

「は？」

土方は思わずそう返すしか無かった。

近藤の突飛な考えに、思考が着いて行けなかったのである。

「こ、近藤さん」

土方が近藤にその真意を訊こうとして、

「土方さん」

沖田に止められた。

暫くして、沖田の蘇芳色の目が何かを伝えようとしている事に気付く。

沖田の目は、こう言っている――。

“土方さん、これは近藤さんの策略でさア。”

近藤さんはこの女を真選組隊士として迎え入れ、怪しい動きをさせず、尚且つ見張るつもりでさア。

近藤さんもやる時はやる男ですぜイ。どうか、この話に乗ってやって下せエ。”

少なくとも、土方にはそう見えた。

確かに近藤はやる時はやる男。

それは、昔から知っている。

真選組の局長としての近藤を、土方は信じてみる事にした。

「お、お前、葵とか言ったな。どうだ、俺達と一緒に攘夷志士をひっ捕まえねえか」

土方は心の中で、ヤベ、俺舞台に立てるんじゃない？とか密かに思っていた。

まあ、そんな土方の胸中はさておき、真選組の局長、副長から入隊を勧められた葵は――！

「良いですよ」

普通に、承諾していた。

その潔さに、近藤も土方も、一瞬目が点になった程である。

三人は、葵の承諾した理由が皆目見当もつかない。

かくして何やかんやで、謎の少女・神崎葵は、何故か武装警察・真選組に入隊する事となった。

第四訓 ジャンプは早めに買いに行こう 要らぬ体力使う事になるから

「えー、新隊士を紹介する」

その土方の一言に、隊士達は浮き足立つ。

まるで転校生が来た時の小学生の様だ。

いくら男が来ると解っていても、やはり気になる物だ。

だが、襖を開けて入ってきたのは、男ではなくて、

女、だったのだ。

「この度、副長補佐隊長に就任した神崎葵です。宜しく」

現れたのは、正真正銘の女。しかも美少女。

隊長クラスの隊服を纏い、下はオリジナルなのか、ミニスカ。

随分と、しかし丁寧に使い古された刀を差し、堂々としたその姿は、まごう事無い、侍の姿であった。

しかし、女。

それが、隊士達の胸に引つかかっていた。

「おい、結構可愛くないか？」

「ああ、足細っ」

邪な声よこしまが遠慮無しに飛び交う中で、誰かが疑問を持った。

「あの、副長。『副長補佐隊長』っていうのは、どういった役職で
しょうか」

その質問に、他の隊士も疑問を持ち始めた。

そんな役職、今迄誰も耳にした事が無かったからである。

「その名の通り、副長^{オレ}を補佐する役職だ。それから、一番隊から十番隊迄の統率も兼ねてる。

コイツの入隊にあたって新しく作った」

「こんなムサイ男達と同じ位置で仕事なんか出来ませんからね」

土方の説明の裏で葵がボソツと毒を吐いた事は、沖田しか知らない。

——昨日、

「ただし、入隊にあたって条件があります」

部屋で座布団に座り、そう切り出す葵。

「おう、何でも言ってみろ」

またもや、過去の失敗を繰り返しそうな発言を軽々とする土方。

「まず一つ目、私は一人部屋にして下さい。しかも、なるべく別の隊士達の部屋から遠い所に」

右手人差し指を立てる。

「ああ、そのつもりだ」

「そうですか、良かった。」

次いで二つ目、先程局中法度を大体拝見しましたが、『第12条 マガジン以外の漫画局内で読む事なかれ』、これを『第12条 マガジン以外の漫画局内で読む事なかれ（ただし、神崎葵は例外）』に変更して下さい、即刻！」

中指も立て、土方に詰め寄る。オーラが怖い。

「……………ああ、解った」

「当然ですね。これが通らなかつたら辞めてる所でした」

何とか危機を脱した三人。

「それから三つ目、私専用の新たな役職を作って下さい。それと、出来るだけ高い地位の所に配置お願いします」

あくまで真顔で、薬指も立てる葵。

「な…」

「以上が条件です。」

どうしますか？これ全部呑めない様なら私、今直ぐ出て行きますけど」

「……………解った、お前を副長オレの補佐及び、全隊を統率する役職に任命する」

「有難う御座います。で、役職名は何ですか？」副長抹殺許可隊長」
「？」

「んなわきゃねえだろ！何か？お前も俺の命狙ざってんのか！？」

溜め息を吐く土方。

「……『副長補佐隊長』だよ、お前の役職名」

「という訳で、今日から私が実質、真選組のNo.3です！

私にタメ口は厳禁、隊長と呼びなさい！

あと、私以外が許あんたらされてないからといって、私のジャンプ回し読みしたりしたら………ブツ殺すから 以上！」

一方的に告げて、急いで部屋を後にする葵。

隊士達は、呆然としている。

近藤、土方、沖田の三人は、慌ただしく会議を終わらせ、同じく部屋を後にした。

「おい、葵！何処行くんだ」

スタスタと歩く葵に漸く追いついた三人。

だがその一方、葵は当然、という顔。

「今日が何曜日か忘れたんですか？月曜日ですよ、月曜日。」

コンビニ行つて来るだけなんで、直ぐ戻ります」

そう言った5秒後、もう葵は居なかった。

江戸の片隅、とあるコンビニに葵は居た。

「あゝもう、何で無いのよ……」

怒りと嘆きが混じった様な声を出す葵。

いつもなら堂々と雑誌コーナーに山積みされている筈のあの雑誌。

だが、何故か今日は一冊たりとも見つからなかった。

此処でもう4軒目だ。

「次で無かったら、コンビニ強盗してやる……………」

してはいけない決意を固め、葵は5軒目へと歩を進める。

という訳で5軒目。

もし此処が大量にジャンプを発注していなければ、数分後にコンビニ強盗が押し入る事だろう。

「ありがとうございます、ありがとうございます…」

健気に祈りながら、店内へと足を進める。

直ぐさま、雑誌コーナーに走る。

目を光らせ、見渡すと、発見した『ジャンプ』の文字。しかも残り一冊、ラッキー。

ん？赤マルと間違える様な母ちゃんみたいな真似はしませんよ？

更に表紙が好きな漫画じゃん、と益々心躍る葵。

満を持して、ゆっくりと手を伸ばす。

ガシッ

…おかしいな、取れない。

よく見ると、二つの手がジャンプを掴んでいた。

…おかしいな、私は片手しか出していない筈。

もう一つの手を目で追っていくと、相手も同じ事を考えていたのか、目が合った。

「あ、こんにちは」

「あ、どうも」

お互いに会釈し合い、再び見つめ合う。

其処にあるのは、見覚えのある顔。

着崩した白い着物。

『洞爺湖』と柄に彫られた木刀を腰に差している。

死んだ魚の様な目。

天パの白髪。

耳に入って来た先程の挨拶。

『あ、どうも』

聞き飽きた声。

私の記憶が正しければ、私の脳が正常に機能しているなら、

コイツは、

まさか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6259h/>

漆黒の姫

2010年10月9日23時05分発行